

序章 良心教育の伝統と継承

1875年11月、新島襄は本学の前身である同志社英学校を創立した。以来130年の歳月を経ていまなお、教育にかけた新島の思いは脈々と伝わっている。私学教育にとってもっとも基本となるものが建学の精神とそれに基づく教育理念であることは言を俟たない。創立以来、同志社大学は揺らぐことなく新島の描いた精神と理念を教育の理想として追求し、発展させてきた。

創立者新島襄は1843年、江戸神田一ツ橋に生まれた。蘭学を学び、さらに数学、航海術などを修めるうちに、西欧に学ぶことの重要性を認識し、1864年に国禁を犯してアメリカへ渡った。そしてフィリップス・アカデミーからアーモスト大学に進み、さらにアンドーヴァー神学校に学んだ。欧米の進んだ学問や科学技術に加え、キリスト教に対する理解を深める中で、西欧社会の隆盛の背景にキリスト教精神があることに新島は気づいた。近代国家への道を歩み始めた日本には、科学技術を学ぶとともにキリスト教精神を取り入れなければならない、そしてそのためにはキリスト教を徳育の基礎とする学校が不可欠である、と確信したのである。

帰国した新島は、日本を近代国家として牽引する人材の育成を願い、1875年に山本覚馬、J. D. デイヴィスらの協力を得て、同志社英学校を京都に創立した。その資金は、新島が、帰国を前にヴァーモント州ラットランドの教会で開催されたアメリカン・ボードの年会で、日本にキリスト教主義の学校を建設する必要性を訴えた際、それに賛同した人々から寄せられた浄財であった。数年後、大学設立に向けて動き出し、1888年には徳富蘇峰の協力を得て20を超える新聞・雑誌に「同志社大学設立の旨意」を発表した。人民の手に拠って設立される私立大学の必要性を広く社会に訴え、同志社大学創設への協力を呼びかけたのである。

新島の宿志は「良心を手腕に運用するの人物」の養成、すなわち「良心教育」の実現であった。「一国を維持するは、決して二、三の英雄の力に非ず。実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民」すなわち「一国の良心」ともいうべき人物の養成を新島は何より願っていた。1890年、新島は大学開学を待たず昇天するが、彼の遺志は教え子たちによって受け継がれ、1912年に念願の同志社大学が実現するに至った。

新島は建学の目的として、良心を手腕に運用する人物の育成を掲げた。智育に偏ることのないよう、キリスト教に基づく「徳育」を並行して進めることで、良心の全身に充満せる人物を輩出したいと願ったのである。この良心教育を具現化するための教育理念として、同志社大学は、キリスト教主義に加え、自由主義と国際主義を掲げている。自由主義とは自治自立心の涵養を目指し、国際主義は偏狭なナショナリズムを超えた開かれた存在であることを目指す。すなわち、徳育の基礎をキリスト教に置くとともに、信念と独立心を持ち安易に人に左右されない「倜儻不羈」なる学生をあえて圧束せず、世界に通じる真の自由人を輩出することこそが、同志社教育の目標である。

この建学の精神と教育理念の下、本学は着実な発展を遂げてきた。1912年に専門学校令による大学となった。私立大学の設置を認める大学令の公布(1918年)を受けて、文学部・法学部・予科・大学院からなる大学として認可を受けた。1948年には、神学部・文学部・法学部・経済学部・教養学部(1951年廃止)を擁する新制大学となった。翌年には同志社

専門学校高等商業部(1922年)に始まる同志社経済専門学校(1944)が商学部として、ハリス理科学校(1981年-1904年)の伝統を汲む同志社工業専門学校(1944年)が工学部として改組編入された。学校教育法によって新制大学移行の先頭をきった私立大学12校のひとつであった。同時期に6研究科からなる大学院も設置された。

その後、1991年には独立研究科であるアメリカ研究科が、そして1995年には同じく独立研究科である総合政策科学研究科が設置された。そして2004年には、専門職大学院として司法研究科とビジネス研究科が設置された。しかし学部教育は、2004年に至るまでの約半世紀の間、神・文・法・経・商・工の6学部体制で推移した。90年代以降の我が国社会の大きな変化とともに、時代のニーズに応えるべく新たな学部の創設が検討され、2004年には政策学部が、そして2005年には文化情報学部および文学部の再編による社会学部が次々と設置された。その間、1986年には、学生数の増加で手狭になった校地問題を解決すべく、田辺町(現京田辺市)に第2の校地を取得し、そこで文系の1・2年次教育を行うとともに、1994年からは工学部が全面移転し、さらには文化情報学部の4年間の学部教育を一貫して京田辺校地で行うこととし、今日に至っている。

近年のこの目覚ましい展開は、新学部の設置にとどまらない。大学会館をはじめとして、築後年数の経過した建物の再建・改築などを進めると同時に、GPA制度の導入、教育開発センターの設立、意思決定システムの合理化など、制度面でも様々なレベルで改革を進めてきた。加えて2006年には、新島が希求した幼稚園から大学までの一貫教育の実現に残された唯一のミッシングリンク、つまり同志社小学校を、大学付属として開設することにした。また2010年には同志社中学校が同志社高校と移転統合されるが、それにともないその広大な敷地が大学に移管されることになっている。これによって狭隘化していた今出川校地においても大胆な将来計画を構想することが可能になった。またそれと連動して、京田辺校地に今出川校地とは異なる学びのコンセプトの下に、新しい学部の創設も検討している。まさに「同志社ルネッサンス」と呼ぶにふさわしい展開がいまスタートしたといえる。

こうした大きな改革に踏み出す契機の一つが、90年代初頭より始まった自己点検・自己評価の取り組みであったことは間違いない。ともすれば自己完結的になりがちなのは大学組織の通弊であるが、とりわけ同志社大学のように長い伝統に裏付けられた大学では、伝統がややもすれば足枷となる傾向がより強く見られる。こうした殻を打ち破るために不可欠なものは、まずもって教職員の意識改革である。その点で、自己点検・自己評価の取り組みが果たした役割は特筆に値する。意識改革が90年代を通じて教職員の間にも広く深く浸透することで、今日の躍動のための必須条件が整えられたといえるだろう。

「同志社大学設立の旨意」には次のような言葉が記されている。「諺に曰く、一年の謀は穀を植ゆるにあり。十年の謀は木を植ゆるにあり。百年の謀は人を植ゆるにありと。けだしわが大学設立のごときは、実に一国百年の大計よりして止むべからざる事業なり」。また、新島は明治維新の功労者である勝海舟との会談で「同志社の完成には200年を要する」という言葉を残している。実に二世紀に亘る一大事業の完成にむけ、同志社大学はいままさにもっとも重要な段階を経つつある。今後ともその歩みを止めることなく大胆な発想の下に改革を行っていくが、相互評価など社会からの評価を受けることでその事業をさらに充実した方向に導びいていきたい。その意味でも、この度の自己点検報告書に対する評価は、本学の将来にとって大きな意味をもつものと考えている。